



第92話 置賜郡(山形米沢地方)のハッカ

薬学雑誌 1897 年度(明治 30 年)p 798-801

上杉鷹山は童門冬二の同名本(1983)で一躍有名になったから、それ以前は知る人少なく、明治のころは誰にも知られていないと思っていた。ところが薬誌に出てきた。記事は「薄荷に就いて 置賜郡に於ける薄荷の沿革」と題する4頁の論文である。「旧米沢藩主、上杉鷹山公が殖産事業について深く鼓舞奨励せられたることは治く世の知るところなるが、薬品に關してもまた幾多の遺功を垂れ給へり。公は薬草に経験ある士を江戸表より招聘し吾妻山中の植物を調査せしめたるに、数多くの薬草を発見せり。次に会津より人參の種を取り寄せ(略)」。

薄荷(ミント)は換金作物として安政年間に岡山や広島で始まったらしい。しかし明治初期にかけて主産地は山形に移った。山形南部が盛んになったのは、このように鷹山以来、薬草栽培が盛んであったからである。薬誌には歴史、栽培法、成分(油・脳)の製造法が書かれている。著者は肥料が大事だという。山形東村山郡の薄荷が苦く香り乏しいのは荏粕を使っているため、岡山県産に異臭がするのは魚を肥料に使っているためと推理する。置賜郡は人尿を使っているから良いのだと。

水蒸気蒸留によって薄荷油を抽出し、ここから薄荷脳とよばれる複合結晶を得る。食品、生活用品だけでなく、現在も薬局方にあるように医薬品としても重要であった。当時は欧米でメントールの需要が高かった。しかし外国産薄荷油はメントール含量少なく、また英独仏では日本から苗を取り寄せても年々その成分含量が低下し栽培断念、日本から薄荷脳を輸入せざるを得なかった。当時英国産が最上とされたが、著者は明治26年に米国博覧会に出品、優等賞を得たという。

その後、山形県人などの移住により明治時代に主産地は北見、網走地方に移る。戦前にホクレンが北見工場を建設し、一時世界生産量の7割を占めた。戦後も朝鮮戦争の影響でアメリカ向け輸出が増え、作付面積、生産が拡大したが、1960年代以降は外国産の安価な薄荷(インド、ブラジル産や合成品)に押され、輸入自由化のあと80年代に工場を閉鎖した。現在は数軒が栽培するのみという。

TRPM8の研究が進みメントール類の新しい適応症、利用法が見つかって、薄荷の栽培が復活することはないだろう。

小林 力

